

〔 2 〕 職員の健康診断

〈現状の説明〉

職員の採用時等の健康診断，一般定期および特別定期並びに臨時の健康診断は，保健管理センターにおいて実施することが長崎大学健康安全規則第11条に定められており，下記の項目の健康診断を実施している。

一般健康診断は例年6月に文教地区・片瀬地区職員を実施していたが，学生健診の受診率向上に伴い，夏休み前は多忙なため，平成12年度より職員健診を9月に移動した。

健康診断項目

項 目		全 員	35 歳	35歳以上	40歳以上
一 般 定 期 健 康 診 断	身 長 ・ 体 重	◎			
	胸 部 X 線 撮 影	◎			
	検 尿	◎			
	血 圧	◎			
	内 科			◎	
	肝 機 能 ・ 脂 質 等 検 査 (GPT, γ -GTP, TC, TG, HDL-C, LDL-C, UA, FBS)		◎		◎
	胃 検 診				◎
	肺 が ん 検 診 (喀 痰 細 胞 診)				◎
	大 腸 検 診 (便 潜 血 反 応 検 査)				◎
特 別 定 期 健 康 診 断	放射線業務従事者健診（年4回実施） 深夜作業従事者健診（年2回実施） 異常気圧下及び騒音下作業従事者健診 HBs 抗原・抗体検査 VDT 作業従事者健診				
そ の 他	骨粗鬆症検診 採用時健康診断				

〈点検・評価〉

1) 一般健康診断受診率について

一般健康診断の受診率は平成10年度まで約40%であったが、11年度に約5%上昇、さらに12年度5%上昇し、50.5%となんとか5割を満した(図1)。

学部別にみると、経済学部(16.7%)と熱帯医学研究所(20.3%)の受診率が低い。熱研は11年度と比較するとかなり上昇はしているものの、経済学部は相変わらず低い(図2)。キャンパスが健診場所(文教地区)と遠く離れているためであろうか。

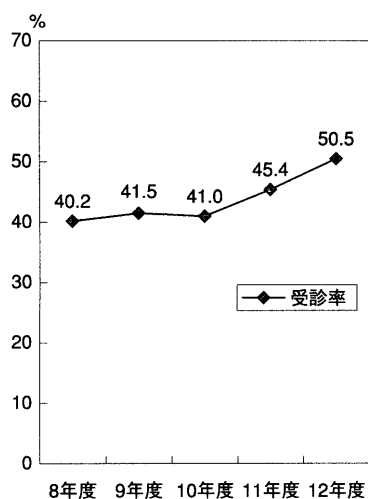


図1 一般健診受診率

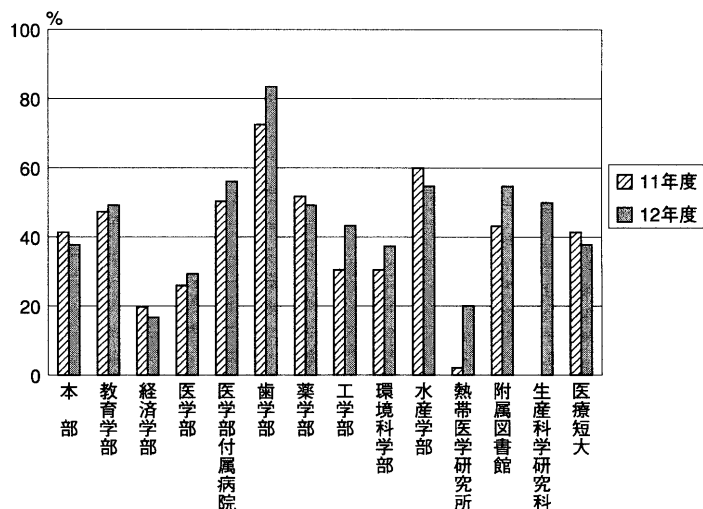


図2 学部別一般健診受診率

坂本地区(医学部・医病・歯学部・熱研・医療短大)については、受診に要する時間をなるべく短く、スムーズに行えるようにと検討の結果、12年度は、日程を3日間から6日間に倍増し、男女を別々の受診日として、受付時間も考慮した。その結果、健診に費やす時間は短縮でき、医療短大を除いて受診率の上昇が得られた。しかし、女性用に設けた日はほとんど受診者がいなかった。これは、女性職員は看護部がほとんどであり、胸部X線撮影のみを別日程で行うためと考えられる(受診率約90%)。本来なら看護婦は、深夜作業を行うため、内科診察が必要である。毎年、深夜作業健康診断(自覚症状、血圧、検尿:自己実施)で、頭痛100—110名、胃腸障害50—70名、その他の自覚症状を370—400名の者があげている現状である。看護部職員が内科診察等を受診できるように、日程についてはさらに検討の必要がある。

2) 精密検査受検率について

胃・大腸検診に関しては特に癌の疑いもあるので、精検未検者には、再度受診勧告をしている。今まで大腸検診(便潜血)は、人事課より各学部庶務係を通して検診結果と精密検査の通知も任せていたが、12年度より精検通知はセンターから行い、胃検診同様、1月に再度受診勧告をするようにした。その結果、精検者が7.7%から87.5%と大幅に向上した。

〈改善・改革に向けた方策〉

1) 人事課との協力について

平成12年度から大学の事務一元化に伴い、職員健康診断の担当は各学部庶務係から人事課へ全学取りまとめられた。センターとしては職員の健康管理を考えていく上で、人事課との協力が不可欠なため、お互いの意見交換を行える場を持ちたいと考えている。

2) 受診率向上について

一般定期健康診断の受診率を更に向上するためには、職員自身に健診の重要性を認識してもらうことが大切であるが、非常に難しい問題である。健診の方法や日程に関しては、できることから改善を続けている。平成13年度の坂本地区健診については日数を延長して、看護部職員に内科診察も受けてもらうように配慮する。理想的には医学部附属病院内に坂本分室を設置し、健診を行うことが望ましいので、附属病院側の理解を得られるよう引き続き働きかけたい。また、経済地区職員はキャンパスが離れているので、その点を考慮して検討する必要があるのではないだろうか。

3) 健診結果の報告について

健診結果の報告は、一般健診およびVDT作業従事者はその場で説明し、胸部X線は異常者だけに連絡している状況で、受診者の手元には残らない。それ以外の健診については、直接個人にまたは各部局長を通じて書面で通知している。職員本人が自分の健康に関心を持ってもらうためにも、将来はすべての健診結果を書面にして個人通知できるよう検討していかなければならないことが、課題として残っている。